

海女(Ama)に出逢えるまち 鳥羽・志摩 ～素潜り漁に生きる女性たち(鳥羽市、志摩市)

ユネスコ無形文化遺産登録も目指す 海に生きる女性たちの文化

身一つで海に潜り貝などを採る海女。鳥羽市・志摩市を含む伊勢志摩の海女漁は弥生時代から始まっていたとされ、生活文化や信仰などにも大きく関わってきました。今回は令和元年度の日本遺産にも認定された海女文化をご紹介します。



海女漁は豊かで美しい海があればこそ



鳥羽市菅島のしろんご祭り



海女小屋では海の幸も楽しみ



志摩市のおご湾

神事とも結びついた海女漁

海女は『万葉集』や『枕草子』に登場するなど、古くから存在が知られていました。奈良時代に海女の採るアワビは貢ぎ物として都へ運ばれたほか、鳥羽市の国崎では今でも「熨斗鮑」を作り、伊勢神宮に奉納しています。また海女漁は素潜りという原始的な漁法だからこそ、危険と隣り合わせ。今でも海女たちは手ぬぐいなどに魔よけのしるしを付けるほか、伊勢神宮の別宮・伊雑宮や「石神さん」として知られる鳥羽市相差の神明神社は海女たちをはじめ、漁業関係者の信仰を集めています。

海女文化の認知度向上を

海女漁を直接見る機会としては7月に行われる「しろんご祭り」などがありますが、海女とふれあい、話を聞くことができ、

人気の「海女小屋体験」です。これは海女たちが体を温めつつ潮の流れや天気など情報交換を行う場所

に因んでつくられたもので、海女たちの採った海産物を味わいながら話を聞くことができます。

日本遺産となった海女文化を、「まずは地元に対し、日本遺産に認定されたという認知度を浸透させる。観光ガイドの育成や多言語化による情報発信も今後の課題だ」と両市協議会。それと並行して鳥羽市では「海の博物館など、海女関連展示の充実を」(市教育委員会社会教育係長文化財専門員の豊田祥三氏)、志摩市では「海女小屋体験+船など、二次交通をセットにしたプランを考えていきたい」(市産業振興部観光商工課主事の森本泰史氏)。さらに後継者の育成や海女の所得向上への取組のほか、観光客受け入れ態勢の整備を図り、将来的にはユネスコの無形文化遺産登録を目指していく考えです。



海女の採るアワビは特産品



伊勢神宮に奉納される熨斗鮑

JAPAN HERITAGE
日本遺産